

## 2. そのとき親たちは

%)  
し  
る  
.7  
.8  
.9  
.1  
1.2  
.9



さて、こうした「体罰」をわが子が受けたときに、親たちはそれをどう受けとめたか、今度は中学生の親たちのデータを用いて見てゆこう。

まず図6は、小学校時代、わが子が体罰を受けた経験である。子どもが体罰を受けたことが1度もない親は44%でしかなく、半数以上が1度以上の経験をもっている。とくに「わりとよくあった」と答えた者も1割に達する。性別で見ると図7のように、さすがに男子に多いが、「わりとよく体罰を受けた」女子も9%ほどいて、この部分の数字は男子とそれほど違ってはいない。

さて図8は、教師から体罰を受けたとき、子どもがそれをすぐ母親に話したかどうかである。図が示すように、「帰ってすぐ話した」40%、「しばらく日がたってから話した」24%とはほぼ3分の2のケースが親に打ち明けている。ただ、これはあくまで、親が把握したケースについてだけの結果であり、実際には叱

られたことを話そうとしない子どもの割合は、もっと高くなるであろう。

では、体罰を受けて帰ったあと、子どもたちはどんなようすだったのか。図9を見ると、われわれには残酷と思える体罰を受けた割には、子どもたちは元気そうである。67%の子がいつも通りのようすであり、少し元気がないようすが見られた子33%のうち、多くが1、2日で回復してしまっている。

しかしよく見ると、1週間くらいも元気がなかった子が4%、もっと長く元気がなかった子が3%と、この7%の数字を少ないとして片づけてしまってはならないだろう。母親の目にまで元気がないようすが続くと、タフで回復力の早いはずの子どもたちにしては、その打撃の大きさが推測される。67%の変わらず元気だった子どもたちにしたって、その胸の中で深く傷ついていないとは言いきれないであろう。

さて次は、子どもたちの体罰に対する受け

とめ方である。母親の目を通してではあるが、図が示すように、素直に反省しているようすが見られたケースは半分でしかなく、残り半分は大なり少なり不満や反発を示している。また図中の3が示すように、先生に対する気持ちも、「体罰を受けてから、かえって親しみや好意を抱くようになった」と見られるケースはわずか5%でしかない。3分の1は以

前より嫌うようになっている。「あまり変わらなかった」57%の中にも、おそらくふだんから先生を嫌っていて、その態度がそのまま変わらず持続したケースも含まれるだろう。とすると、体罰が教育的効果をもつなどとは、決して思わないほうがいいことは、これらから明瞭である。

図6 子どもが体罰を受けたこと(中学生の母親)

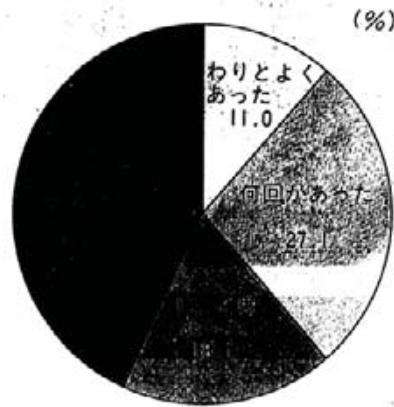


図7 子どもが体罰を受けたこと×性別

		(%)			
		1度もなかった	1、2度あった	何回もあった	わりとよくあった
男	女		33.6	33.6	12.9
女	子		19.4	19.4	8.7

う  
か  
変  
と  
か

図8 体罰を受けたことを家の人に話したか(中学生の母親)

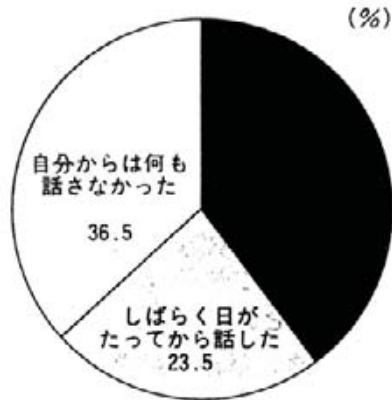
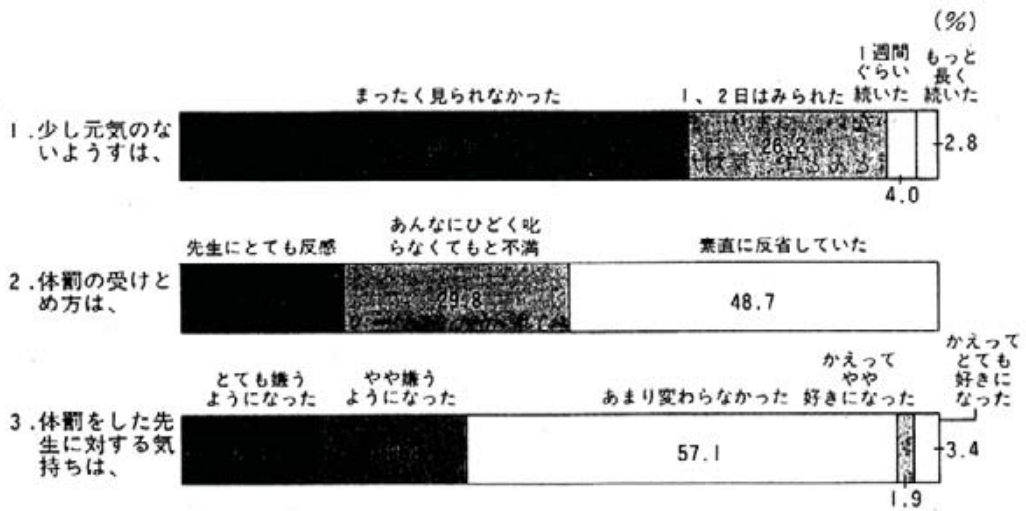


図9 体罰を受けたあとの子どものようす(中学生の母親)



## ● 教師の体罰についての母親の評価

さて以上のデータが物語る体罰の状況について、母親たちはこれをどう受けとめたか、さらにデータを追ってみよう。

まず図10は、わが子が体罰を受けたとき、母親がそれをどう受け止め、どう評価したかを示す結果である。

子どもと体罰をめぐるさまざまな状況を見てきただけに、われわれはこの結果に少なからぬショックを受けた。なんと、半数を越える母親たちが、「悪いことをしたんだから、ピシ

ッとやってもらってよかった」と言っているのである。母親たちにもう一度表1から表4までをつぶさに読んでほしい。子どもたちの置かれている状況をよく知りもせず、気軽に、「体罰をされてよかった」などと言っていてよいのだろうか。「されてよかった」体罰などというものは、そうめったにあるわけではないと思われる。愛のムチ説や体罰信仰とも言うべきものを、ぜひ棄ててほしいと願う。

## ● 抗議したか

図11は、図10の中で「何があったにせよ、体罰するなどはとんでもない」とした16%の親の中で、どれだけの人が実際に先生に抗議したかを示したものだ。が、「した」と答えた割合は19%でしかない。つまり、教師の体罰を容認する親がほとんどで、反対だと憤慨している親たちの中でも、先生に抗議をしにくい

人はごく一部である。結果として教師のもとに届く声は、「ピシッとやってくれてよかった、遠慮なくやってください」というものばかりで、抗議の声はめったに聞かれないことになる。たてまえとしての体罰禁止の陰で、実はこうした母親たちの声が、確実に教師の体罰を支えているのではなからうか。

## ● 体罰をどう考えるか

この章のしめくりとして、図12に、親たちの考える体罰の効果についての結果を示した。全体としては、親が用いるにせよ教師が用いるにせよ、「たまにならよい」とする者が7割を占める。しかし、生みの親、すなわち十分な愛情と信頼に結ばれた親子の歴史の下での体罰と、先生とは言っても赤の他人、時にはかならずしも十分でない人間関係もあるはずなのに、そうした中での体罰とが、ほぼ

同じように考えられている点が、なんとも不思議である。そんなに簡単に、ごくたまにならよい、と言ってしまっているのだろうか。体罰は、極めて特殊な状況の下でのみ例外的に許され、かつ教育的効果をもつ行為であることを、もっと心に留めるべきであろう。親の用いる場合の数字はともかく、先生の場合「しつけにはわりと有効」と言っている母親が14%もいるとは、なんたることだろうか。

図10 子どもが体罰を受けたことについての母親の気持ち(中学生の母親)

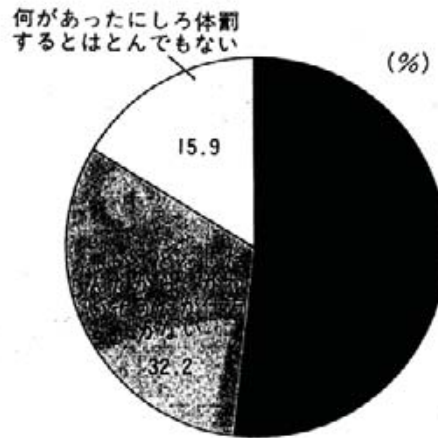
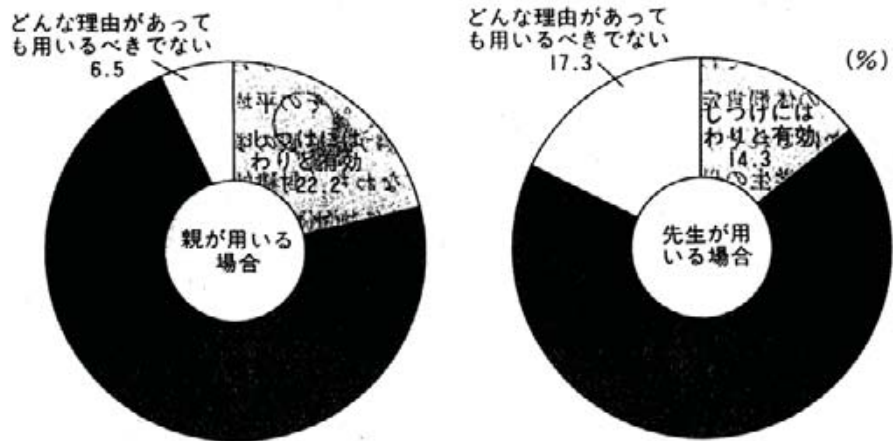


図11 体罰のことで先生に抗議したか(中学生の母親)



図12 体罰の効果(小学生の母親)

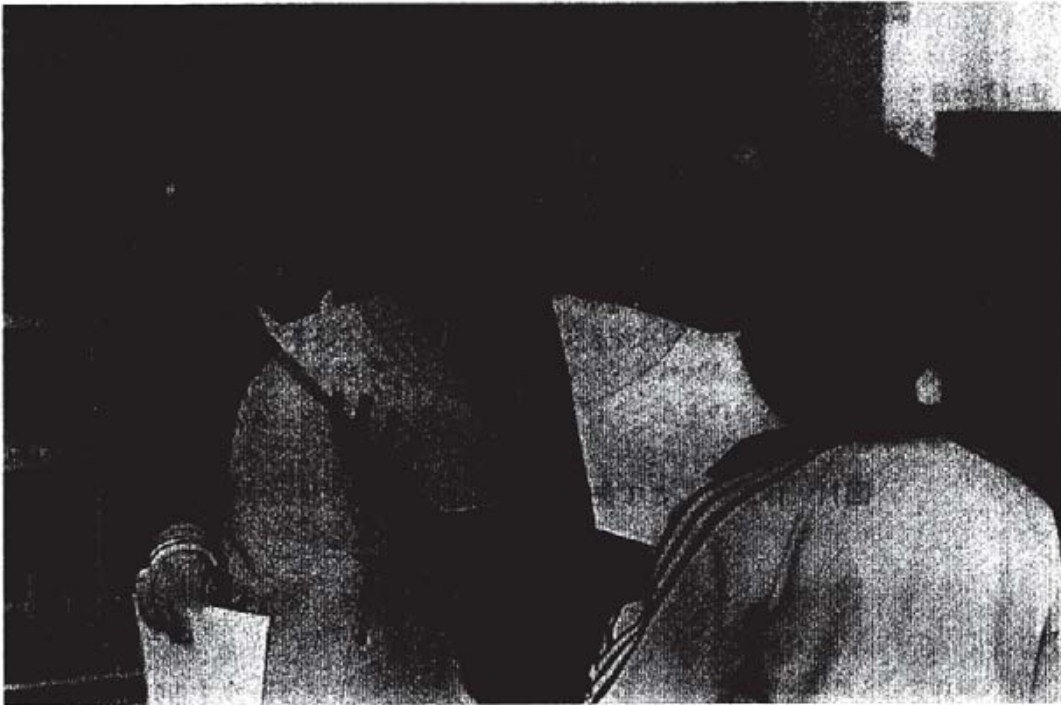


る  
4  
の  
軽  
い  
な  
は  
で  
う。

と  
た  
り  
な  
は  
罰

不  
な  
。 的  
る  
親  
合  
親  
。

### 3. 親たちの叱られ体験



#### ● 親たちの小学生時代

親たちが優しくなったと言われる。ふだんはむろん、叱るべき時にさえきちんと叱ることができないと、折にふれて指摘される。それにひきかえ、昔の親たちはこんなではなかった、体罰も含めてもっときびしい家庭教育がなされたと、年輩の人びとから聞かされる。本当にそうだったのだろうか。その点を明らかにすることで、前章でわれわれが見てきたような、親たちの体罰肯定的な反応のゆえんも、より明らかにされそう。

そこで図13、小学生の母親たちの「叱られ体験」を見てみよう。図を見ると、意外とも思われる結果である。ひと口に言って、対象となった母親たちは、叱られ体験をもたずに育った世代なのである。子どもなら「ときどき叱られる」のは当然のことだから、「しょっちゅう、わりと叱られていた」までを叱られ体験をもつ層と考えると、母親からの叱られ体

験は14%、父親からは8%、先生に至っては2%しか、数字が出てこない。逆に「あまり、ほとんど叱られたことがない」者は、母親については47%、父親には65%、教師には85%という高率に達する。

巻末の集計表によると、本サンプルの年齢は40歳から44歳が26%、35歳から39歳が50%と、30代後半から40代前半の母親がほとんどである。その平均年齢をほぼ40歳とすると、ちょうど終戦の頃に生まれ戦後の混乱期に、すなわち「封建的」「民主的でない」ことを排するあまり、家庭教育、学校教育の中であらゆるしつけを抑制されて育ってきた人たちにあたる。筆者の1人である深谷は、終戦を小学校4年生の時に迎えたが、その日を境に教育の内容が急変し、体育の授業での整列のための号令や、起立/のような日常の授業で必要な簡単なかけ声ですらかけられない状況が

やってきて、子ども心に、こんなに無秩序でいいのか、と当惑した覚えがある。筆者より10歳も若い本サンプルの母親たちは、当惑することすら知らずに育ってきた年代なのである。考えてみると、叱られ体験をもたないのは、当然だろう。

では、体罰を受けた体験はどうか。図14に示したように、ときどきにせよ、体罰を受けた記憶をもつ母親はやはり僅少で、母親については21%、父親16%、先生に至っては5%でしかないのである。

図13 小学生時代、叱られた経験(小学生の母親)

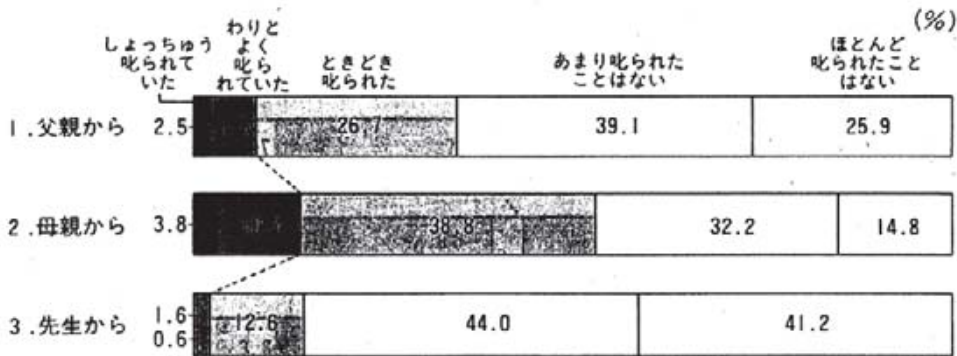
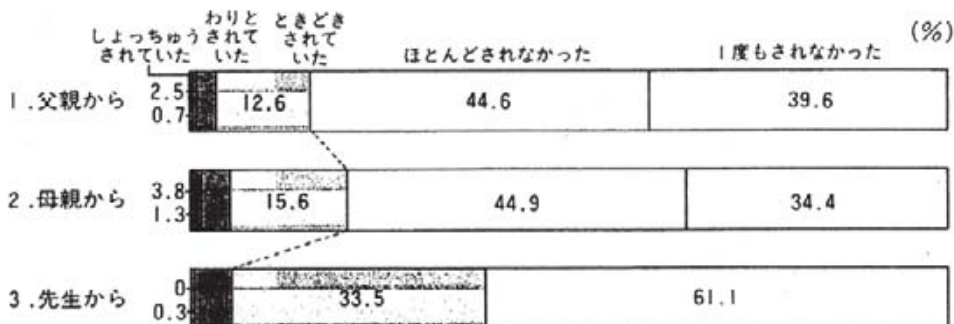


図14 小学生時代、体罰を受けた経験(小学生の母親)



## 昔の教師と体罰

本サンプルの母親たちは、自分たちが小学生時代、担任からはめったに体罰をされたことがなかったと言っている。しかしそれでも図を見ると、約3分の1は1度かそれ以上の体験をもっているようである。しかしおそらくこの設問の時点では「いわゆる体罰をされたことがありますか」に対する反応であるか

ら、多分にせまく限定された内容をイメージして答えた可能性もある。

そこで、もう少し具体的にさまざまな種類の体罰を挙げ、それぞれに体験をたずねてみた。図15は、その昔小学生時代に母親たちが受けた体罰の種類と頻度である。図が示すように、○印をつけたようなストレートな体罰

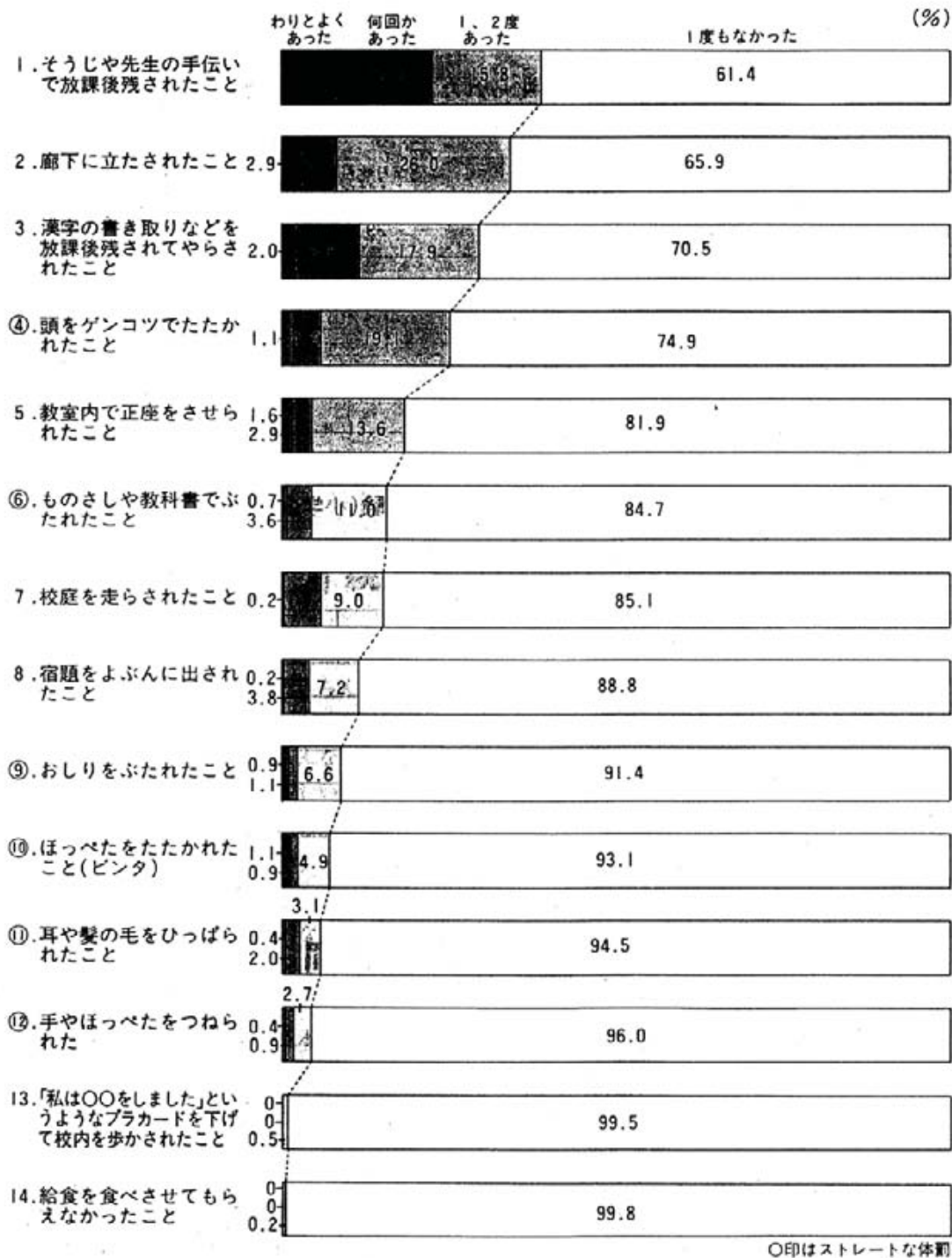
ま  
り、  
こ  
ろ  
ゆ  
り  
と  
あ  
ら  
う  
ト  
致  
こ  
必  
が

は少なく、また全体としてどの体罰も体験率は低い。図14で見たように、確かに母親たちはめったに体罰をされずに育ってきた世代な

のである。

では父親はどうか。図16を見るとさすがに女の子たちよりはよく体罰をされている。○

図15 小学生時代、先生から体罰を受けたこと(中学生の母親)

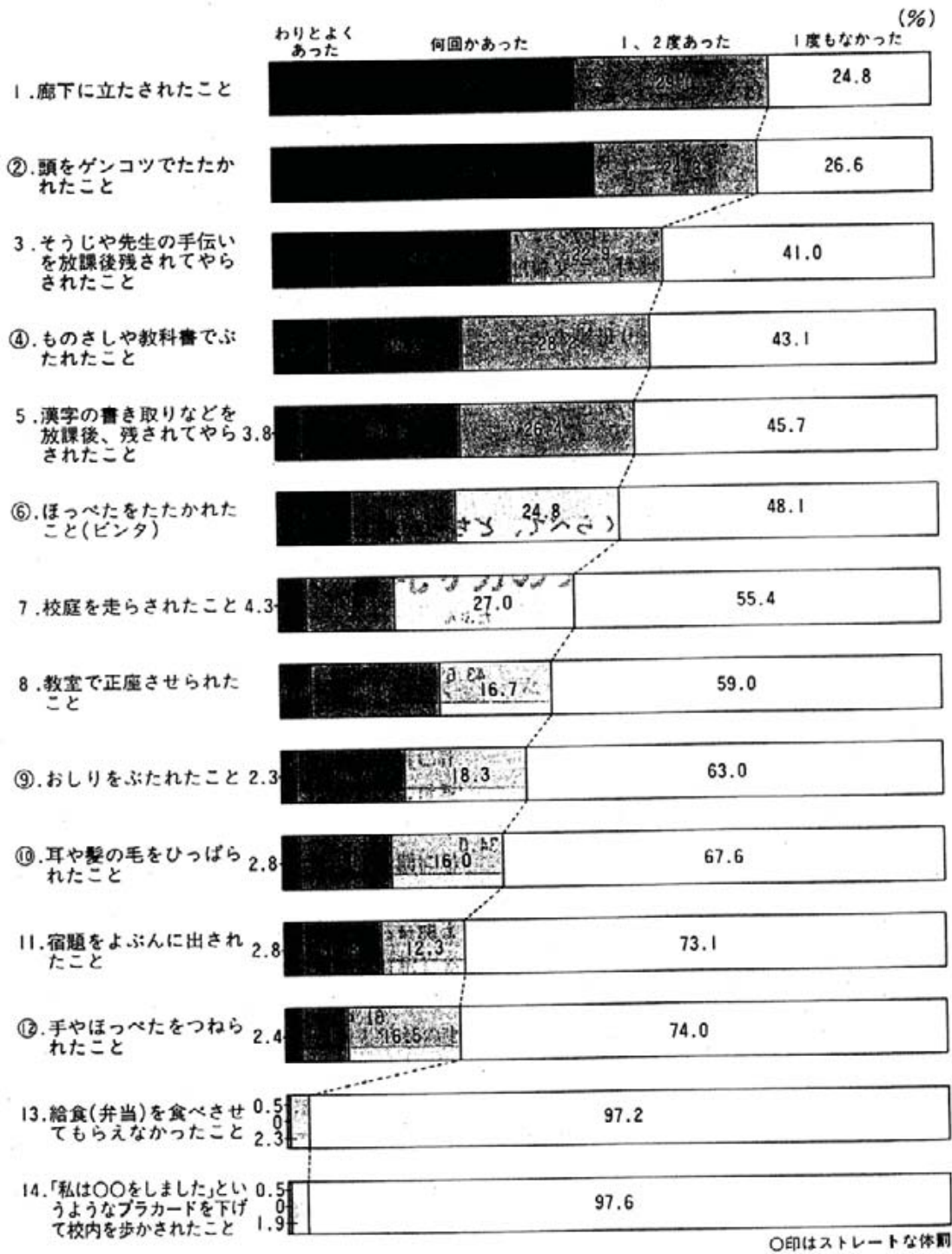




印のストレートな体罰も、だいぶ上位に上ってきている。もし現在だったらどうなのか。本当は現在の中学生に調査したかったのだが、

昨今の状況下では、せいぜい自由記述の欄を用意するだけで精一杯であった。これは後日、いつか機会を得たいと思っている。

図16 小学生時代、先生から体罰を受けたこと(小学生の父親)



○印はストレートな体罰

## 親とくらべて

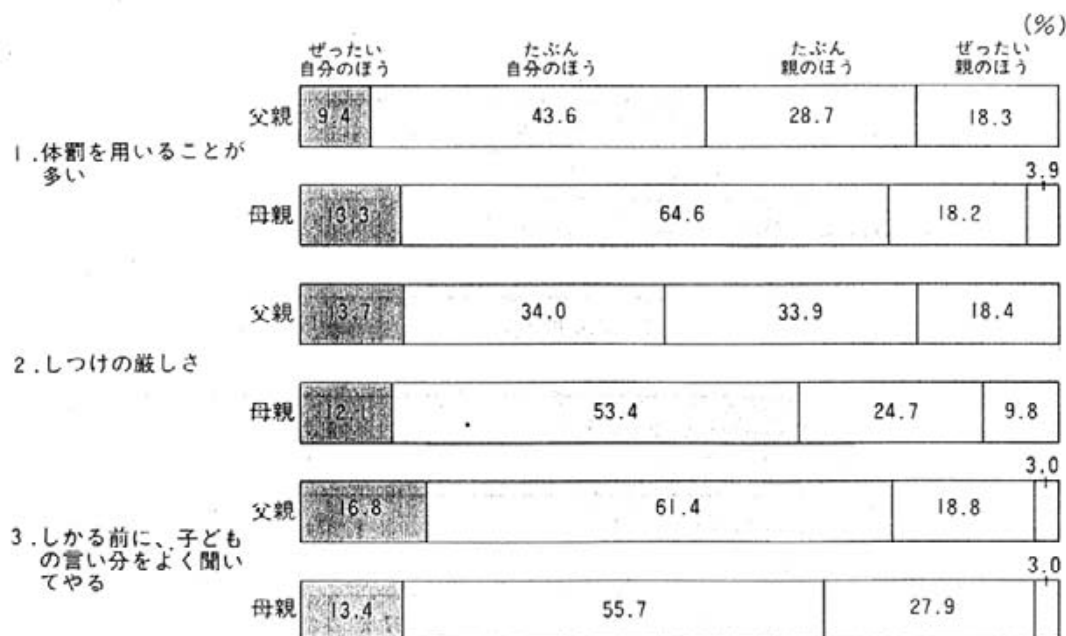
さてそうした体験の下で育ってきて親となった本サンプルに、「ご自分の親と比べて、あなたはどんな母親ですか」とたずねた結果が図17である。すでに見てきたように、叱られ体験、体罰体験をほとんど持たずに育ってきた世代の母親たちは、現在どんな母親となっているのだろうか。

図が示すように、1「体罰を用いることは」の問いに78%もの母親が、「親より自分のほうが多い」と答えている。これに対して父親は53%（親のほうと答えた父親が47%）だから、たいして変わっていない。つまり母親のほうが、昔と比べて暴力化したということだろうか。それと関連して2「しつけの厳しさ」に

ついても、66%の母親が、自分のほうが厳しいと答えている。

しかし母親はコワくなっただけかというところではなさそうだ。その下に示したようには、叱る前に子どもの言い分を聞いてやる点では、母親69%父親78%と、これまた圧倒的に、昔の親よりよく聞いてやると答えている。子どもの言い分は理解しようとしてやるが、罰はきびしく与える。本当にそうなら、ある意味で（体罰を用いる点は別として）理想的な親ということになりそうだが、この辺は多少マユツバという気もしないではない。別のデータで確かめてみる必要があるだろう。

図17 自分の両親とくらべて、どちらが厳しい親か(小学生の父母)



## 4. 親たちはどう叱っているか



### ● 叱り方のタイプ

前章までにわれわれが見てきたのは、時代の谷間で、叱られ体験、体罰体験をたいして持たずに育ってきた世代が母親となって、逆に「自分のほうが親よりきびしい」と自己評価しているようすであった。ほんとうに母親はそんなにもコワくなってしまったのか。もしそうなら第2章で見られた教師の体罰に対する意外に肯定的な反応、「子どもが悪いことをしたのだから、ビシッとやってもらってよかった」が過半数に達する結果が、解釈し易くなる。

さて図18、図19は、現在の母親と父親の叱り方を示したものである。しかし意外なことに、母親たちが言っているほどには、体罰は用いられていない。上位3つは「こごとを言う、どなる、にらむ」。ストレートな体罰に属する「手やお尻をぶつ」は4位で、「ときどきある」を含めてこれをしている母親は5割。

「ゲンコツ」2割、「ビンタ」2割、「物でたたく、ぶつ」1割、「閉め出す」1割、「正座」1割、がその主なものだ。もっと残酷な「つねる」「押し入れや物置きにとじ込める」「食事を与えない」「おきゅうをすえる」等はごく一部でしかない。

しかし、人によっては、これらの数字をかなり大きいものと感ずるかもしれない。子どもをどのくらいの強さ、残酷さで罰してよいかの感じ方は、個人差が大きい。電車の中で子どもを平手打ちにしてはばからない母親もいれば、それを見てまゆをひそめる人もいるのである。そしてひょっとして態度の中立を欠くかもしれないのだが、筆者らはこの数字を意外に大きいものと受けとめる。手やお尻をぶつのは、まだ安全としても、頭をゲンコツでたたく、などはイメージ的に母親のものではないし、後日そのたたいておいた頭に「勉

図18 子どもの叱り方(小学生の母親)

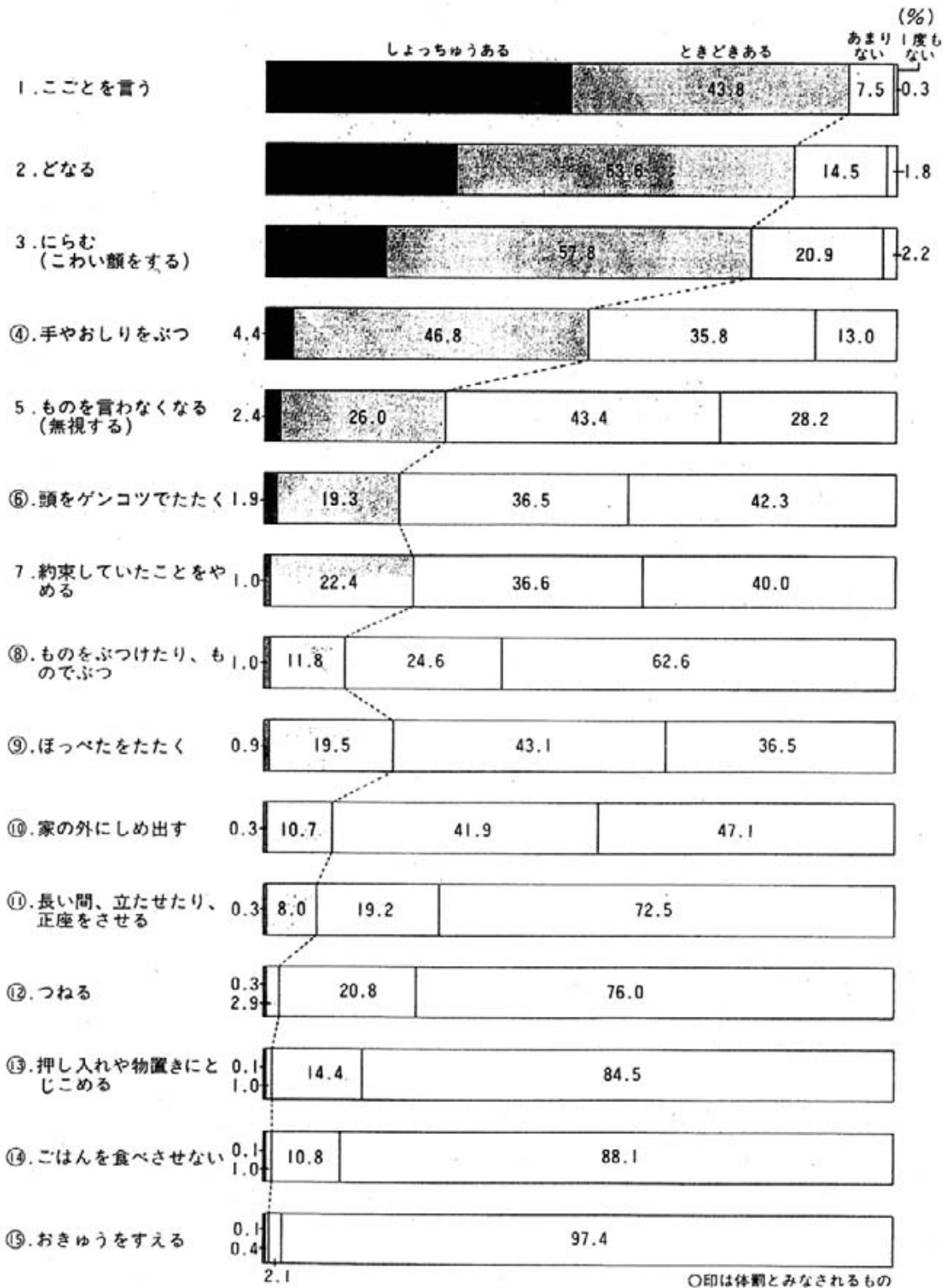
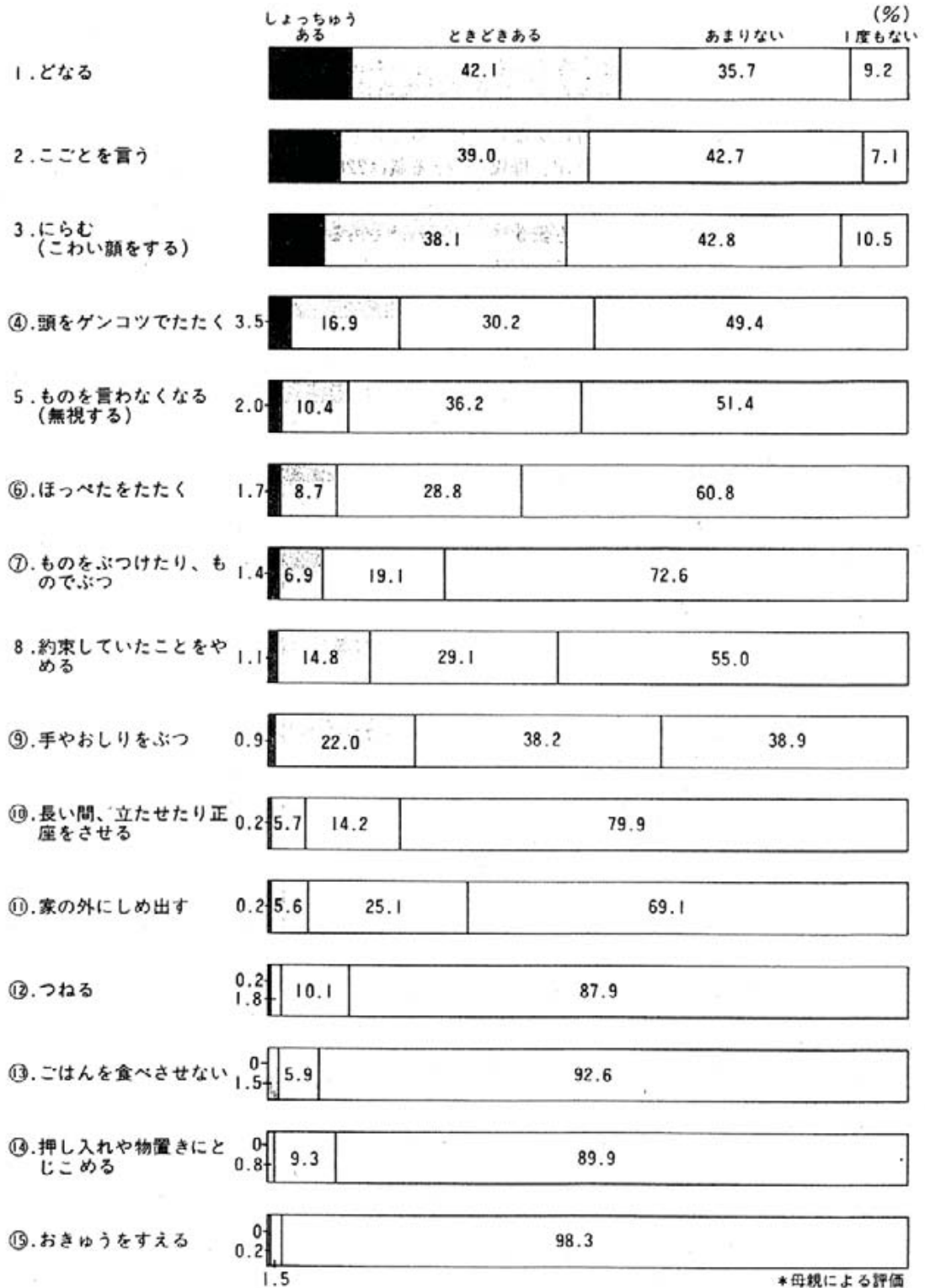


図19 子どもの叱り方(小学生の父親)\*

％)  
度も  
ない  
3  
8  
2



\*母親による評価

○印は体罰とみなされるもの

強しなさい」とは、よく言えるものだという気がする。昔の親だって頭が一番大事なところだから、そこだけは避けるといった配慮があったとも聞くのに。加えて「物でぶつ、ぶつける」「ビンタ」なども、どう考えても女性であるはずの母親のイメージではない。先にわれわれは、女性教師が予想外にひどい体罰を行っているようすを見てきたが、母親がこれでは、女性教師がビンタをしたって不思議ではないのかもしれない。しかも表5にまとめたとように、どの体罰も母親のほうが父

親よりよけいに用いている。かつて「厳父慈母」という言葉があったが、現代は「慈父厳母」なのかもしれない。しかも0.1%だから、700人に1人のレアケースだが、子どもにしょっちゅうおきゅうをすえたり食事を与えない親が、いるのである。これを「ときどきある」まで含めると、罰としておきゅうをすえる親は728人中4人、食事を与えない親は8人いることになる。児童虐待防止法が必要なわけである。

表5 母親と父親の体罰(1度もない%)

	母親	父親
手やお尻をぶつ	13.0	38.9
頭をゲンコツでたたく	42.3	49.4
物をぶつける、ぶつ	62.6	72.6
ビンタ	36.5	60.8
外に閉め出す	47.1	69.1
立たせる、正座	72.5	79.9
つねる	76.0	87.9
押し入れ等に閉じ込める	84.5	87.9
食事を与えない	88.1	92.6
おきゅうをすえる	97.4	98.3

## ●子どもは親の体罰をどう受けとめているか

こうした親たちの体罰を、子どもはどう受けとめているのだろうか。図20は、ビンタをされてもやむをえないと思うのは、自分がどのような悪いことをしたときか、たずねた結果である。図が示すように、多少の程度の差は

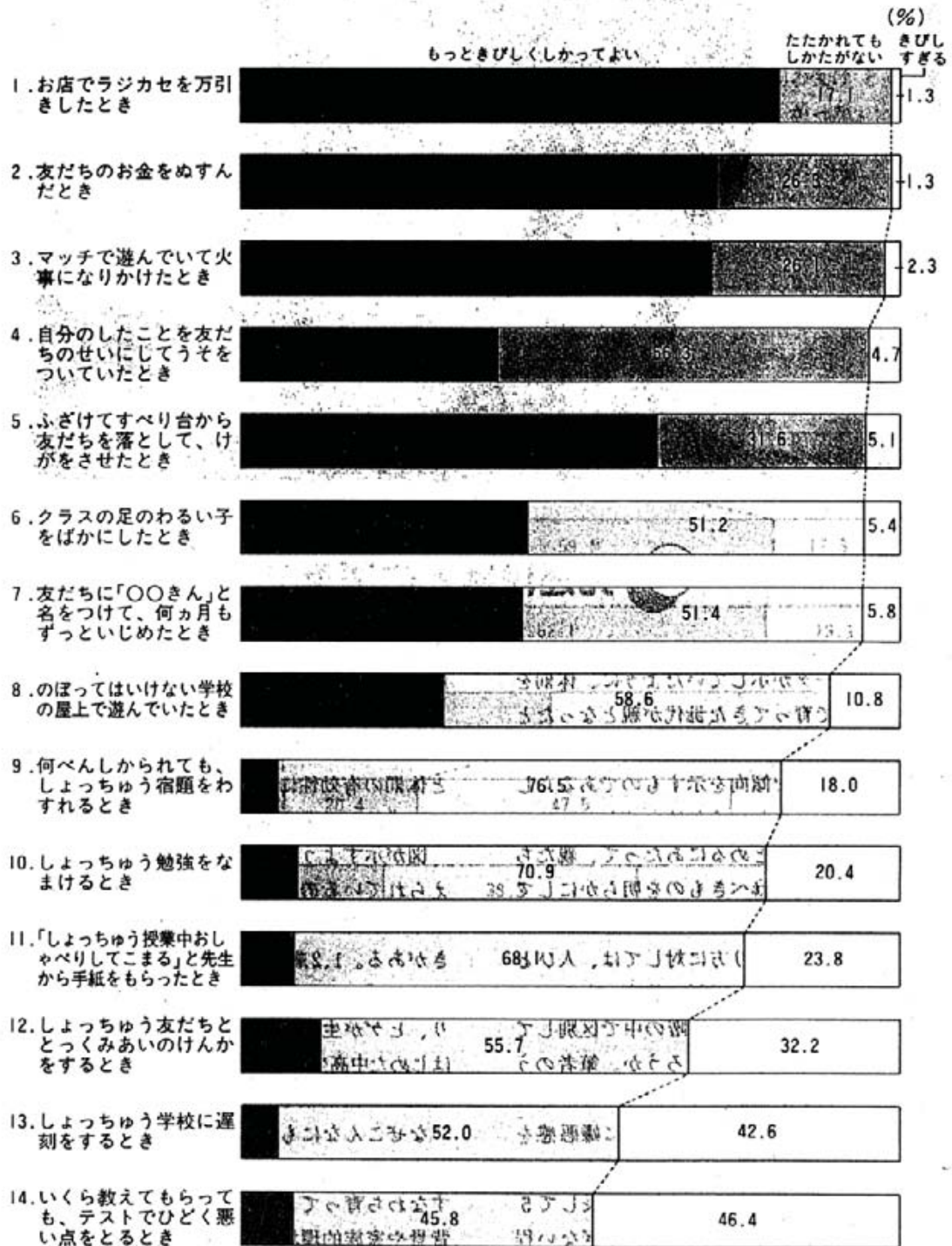
あれ、どの項目でもほとんどがビンタを受け入れている。ビンタで言えば図18に見たように、母親から1度もビンタをされたことのない子は37%で、全体の6割は1度以上経験をもっているおなじみの体罰だから、このよう

に  
ち  
こ  
も  
の  
体  
罰  
を  
ど  
う  
受  
け  
と  
め  
て  
い  
る  
か  
  
1.  
2.  
3.  
4.  
5.  
6.  
7.  
8.  
9.  
10.  
11.  
12.  
13.  
14.

に許容度が高いのだろう。ともあれ子どもたちの周囲には体罰が珍しくないことで、子どももそれに慣れており、それを受けとめてい

るようすが見られる。こんなことでよいのだろうか。

図20 親にほったたをたたかれても仕方がないと思うとき(小学生)



## 5. 親たちは体罰をどう見るか



### ● 発達段階との関連で

以上のデータが示していたように、体罰を経験しないで育ってきた世代が親となったときに示される態度は、体罰の否定ではなく、意外にも肯定的な傾向を示すものであるらしいことがわかったが、それはなぜか。このレポートの終章をまとめるにあたって、親たちの体罰観とでも言うべきものを明らかにしてみよう。

「体罰」という叱り方に対しては、人びとの間に一律に賛成とか反対の態度があるのではなく、子どもの発達段階の中で区別して考えられているのではなかろうか。筆者のうち深谷は、戦争中に子ども時代の前半を過ごし、あらゆる体罰に対して生理的に嫌悪感を持つ者の1人だが、それでも、子どもが2歳から4歳ぐらい（またはせいぜい延長して5歳ぐらい）までの時期には、厳しすぎない程

度なら、直接的な体罰も必要と考えている。しかしこの点は、人によって考え方・感じ方に違いがあるだろう。そこで、子どもの年齢と体罰の有効性についての意見を、母親たちになぞねた結果を図21に掲げた。

図が示すように、いちばん体罰が有効と考えられているのは、幼稚園時代と小学校の低学年で、他は人によって考え方にかなりの開きがある。1、2歳のまだ言語を解さない赤ん坊にも「かなり有効」とする母親が2割もあり、ヒゲが生えかかり自分の背丈を追い越しはじめた中高生にも、「時には有効」と考える母親が2割前後もいる。

なぜこんなにも体罰の是非についての意見が違うのだろうか。おそらくその人の年齢、すなわち育ってきた社会の持っていた文化的背景や家族的环境から生じた結果の外に、も



っと個人的な属性にもよるのだろう。本サンプルは限られた年齢幅の母親たちなので、年齢別の検討はひかえて、図22に示したように、母親の受けた教育期間の長さ（学歴）別の検討をしてみた。図は中卒と大卒のみをぬき出して見たのだが、図が示すように、高学歴の母親は、子どもの年齢が低いうちは体罰を肯定するが、年齢の上昇につれて急激に否定する者の割合がふえる。しかし高学歴でない母親は、幼稚園以降のどの段階においても、はるかに体罰の肯定率が高く、高校生に対してもまた3分の1が、体罰を時には有効もしくは

はかなり有効と考えている。

とすると世に高学歴の母親はごく一部であるから、それほど高学歴でない母親の声が世論として聞こえてくるのは、仕方のないことかもしれない。図が示すように、小学校低学年については中卒の母親たちの83%、高学年については59%もの母親たちが、体罰の有効性を支持しているのである。こうした土壌の上に、第2章で見てきた体罰の受けとめ方「ビシッとやってもらってよかった」が出てきたのであろう。

図21 体罰が有効な時期(小学生の母親)

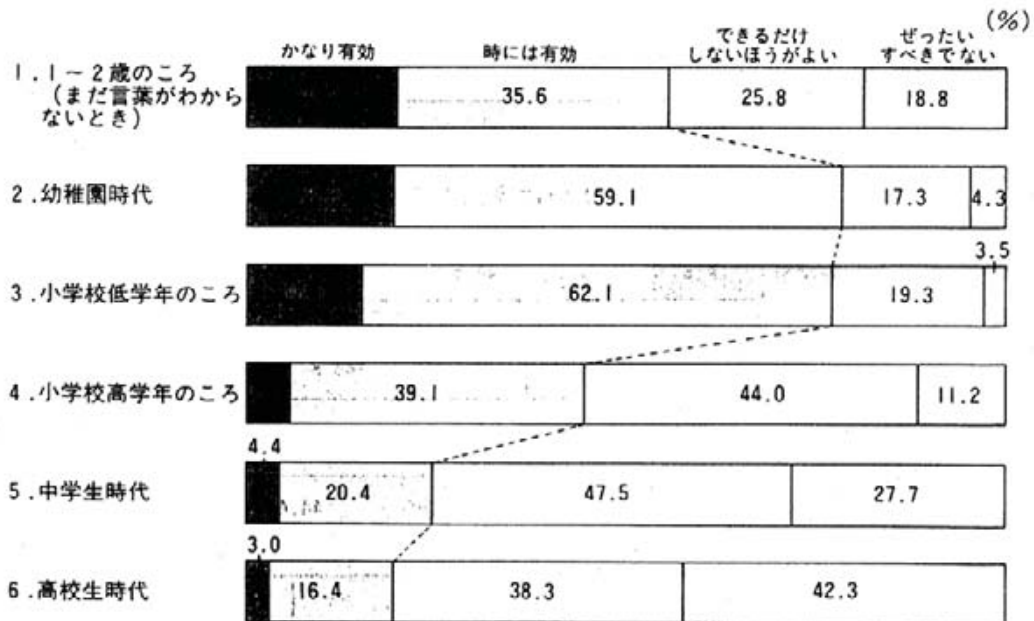
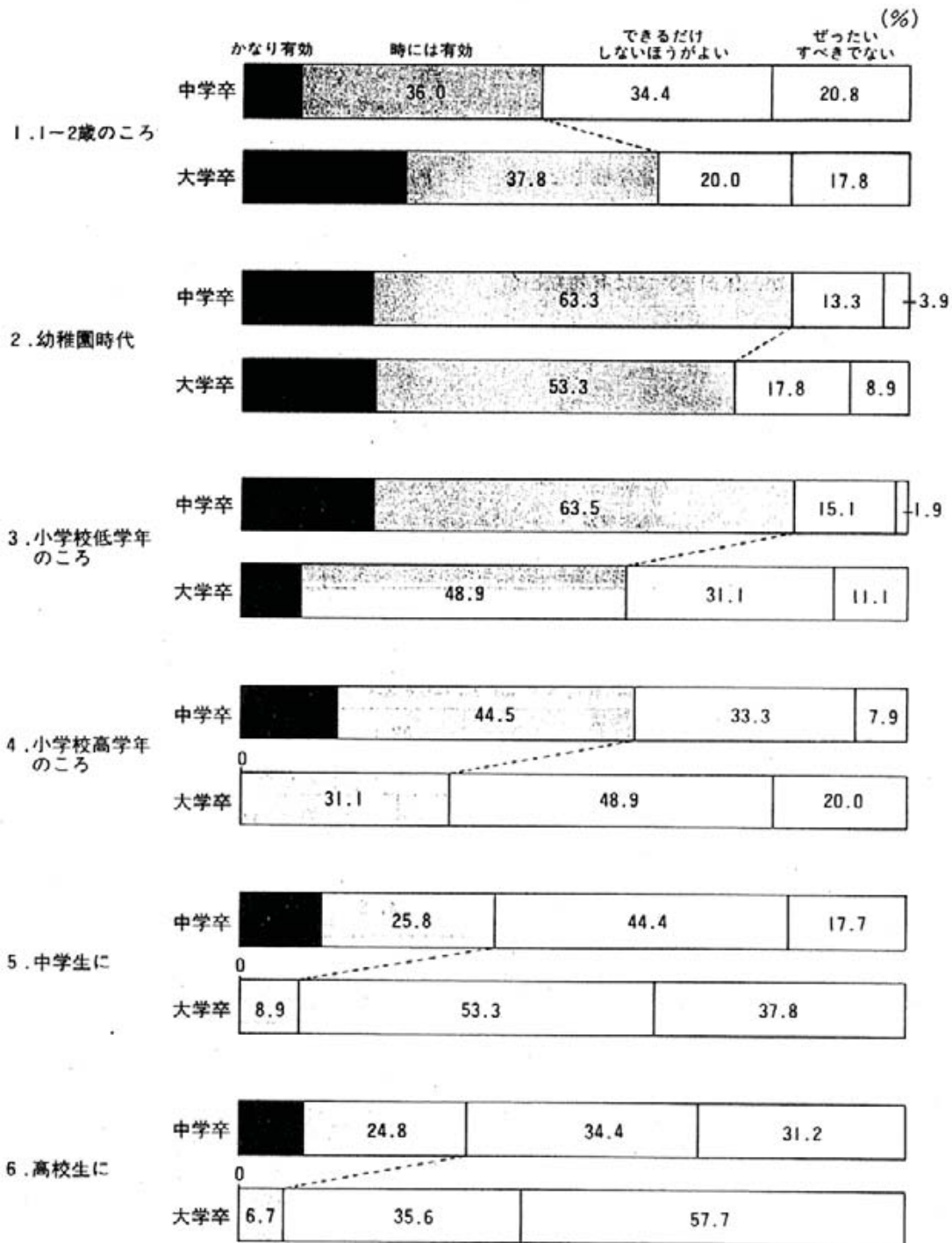


図22 体罰が有効な時期×母親の教育期間(小学生の母親)



次  
教師  
から  
を求  
別  
こと  
とし  
親に  
には  
いる  
あは  
はま  
も2  
り、  
師に

い

## ● 学校で体罰を用いることについて

次に図23は、もっとストレートに、学校で教師が体罰を用いることについて、30代後半から40代前半の年齢層の父親と母親に、意見を求めた結果である。

残念なことに、というよりまことに遺憾なことに、父親も母親も教師による体罰を全体としてかなり強く支持し、肯定している。父親に至っては、5割が「子どもたちのしつけには、必要に応じて(教師が)もっと体罰を用いるべきだ」と答えており、「いかなる理由があっても絶対反対」は4%でしかない。母親はさすがにその声が多少弱いものの、それでも29%が「もっと用いるべきだ」と言っており、「絶対反対」は10%でしかない。昨今、教師の体罰が世間から非難、弾劾されている

にもかかわらず、なぜ学校での体罰があとをたたないのか、常々不思議に思っていたが、実はそうした学校側の高姿勢とも見える態度は、こうした親たちの態度に支えられてのものだったのかもしれない。しかし父親や母親たちは、ほんとうにこれでいいと思うのだろうか。

次に図24は、この点について母親の学歴との関連を見たものだ。図が示すように、ここでも図22と同じく、学歴との強い相関が見いだされる。小学生のしつけに体罰を用いることについて、理由を問わず「絶対反対」なのは、中卒では12%。それが大卒では35%と大きな開きが生じている。

図23 学校で体罰を用いることについて

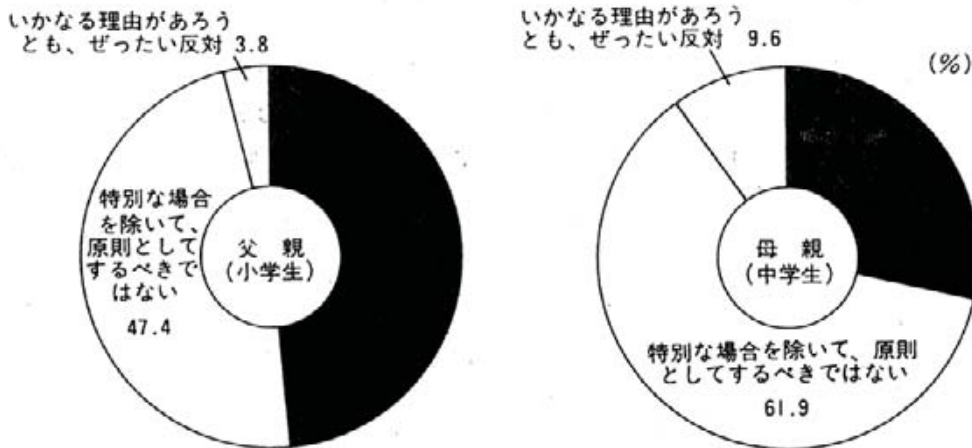
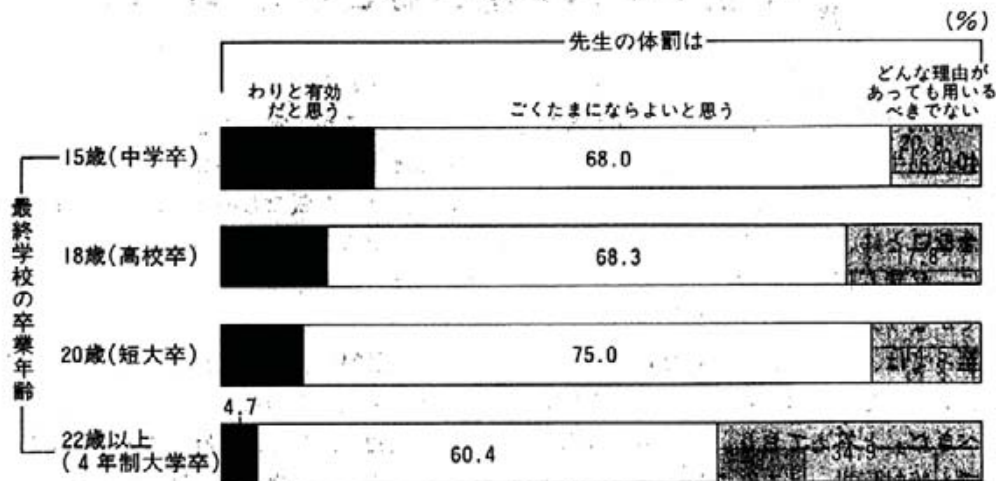


図24 体罰は小学生のしつけに有効か×母親の教育期間(小学生の母親)



## ● どんな体罰なら認めるか

しかしひと口に体罰と言っても、種々のタイプがある。極めて残酷なものから、比較的軽いものまでの中で、どの程度の体罰なら許される、もしくは用いてよいと考えられているのだろうか。

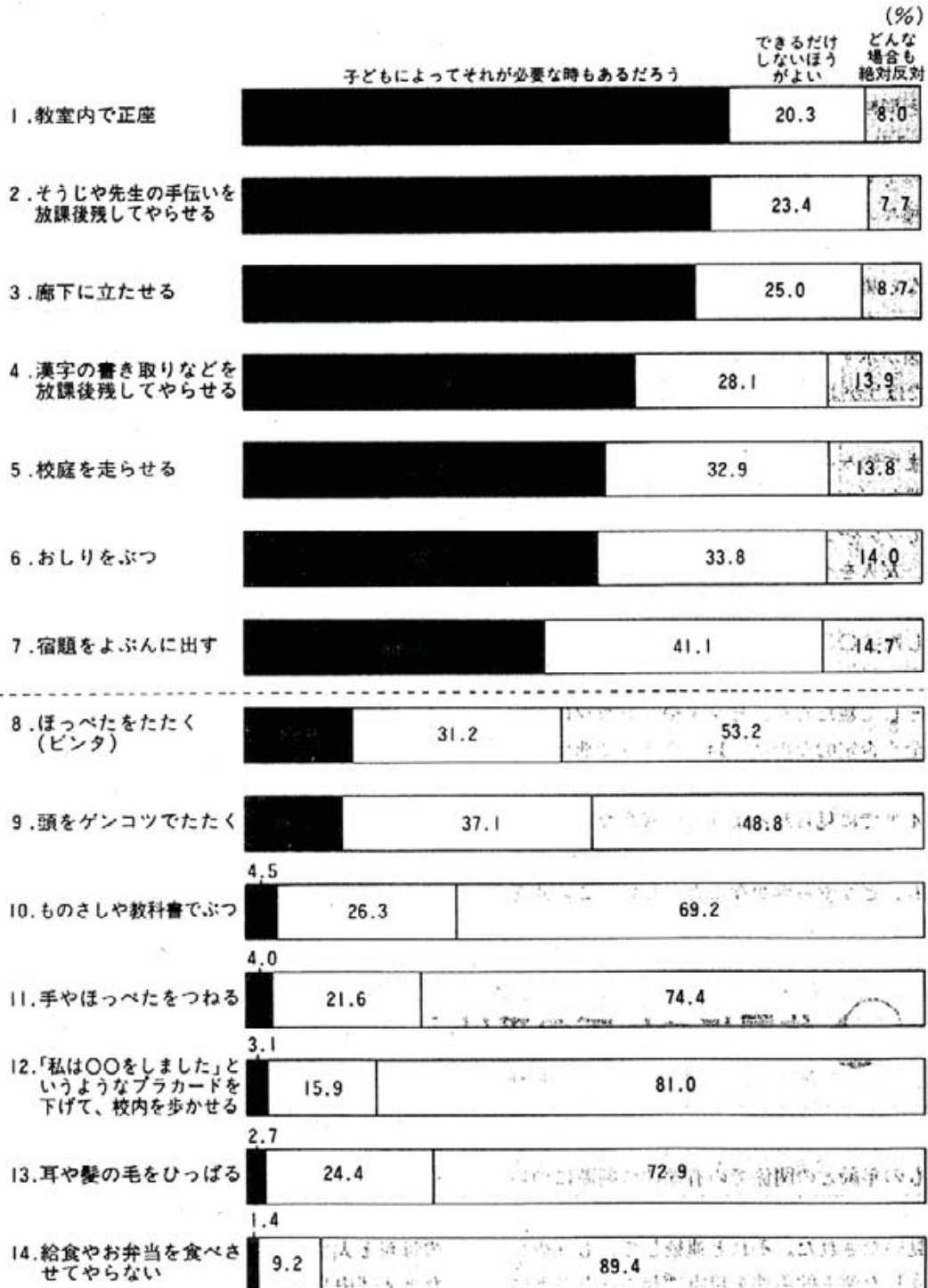
図25に掲げたように、小学生の母親が許容する体罰のタイプは7種類。すなわち「教室内で正座させる」「残して掃除や手伝いをさせる」「廊下に立たせる」「残して書き取りなどをやらせる」「校庭を走らせる」「お尻をぶつ」「宿題をよぶんに出す」までで、体罰としては極めて軽いものである。中には世間的通念として、体罰には入りそうもないものも含まれている。この中で、子どもの体にストレートに与えられる罰は、わずかに「お尻をた

たく」だけである。

8位以下の体罰については、急激に「理由を問わず絶対反対」がふえている。このタイプとしては、「ビンタ、ゲンコツ、ものさしなどでぶつ、つねる、プラカードを下げて歩かせる、耳などをひっぱる、給食を食べさせない」が含まれ、いわゆる体罰らしい体罰は、ビンタをはじめ、皆この中に入っている。

このように、親たちの間に体罰を肯定する土壌があると言っても、その体罰のイメージは決して直接的で残酷なタイプの体罰ではないことを、学校側も世の人びとも心に刻んでほしい。先に見てきたようなデータに安易に乗っかって、残酷な体罰を続行するなどは、むしろあってはならぬことである。

図25 先生は、どんな叱り方をすればよいか(小学生の母親)



由  
イ  
な  
か  
な  
ビ  
る  
ジ  
な  
で  
に

## ● 体罰がやむをえない場合

しかし体罰の是非は、その内容によって違ふと同時に、子どもがどのような悪いこと(許されざる行為)をしたか、それによっても違ってくるだろう。そこで図26は、図25で見た種々の体罰のうち、中ほどに位置するビンタとゲンコツを例にして、「ビンタ等がやむをえない場合があるとしたら、それはどんな場合か」をたずねたものである。

図が示すように、「そのくらいきびしく叱ったほうがよい(ビンタ、ゲンコツをしてもよい)」と母親たちが考えるのは、ほぼ1から8までのケースとみてよいだろう。これらは、①非行(万引き、盗み、これに準ずるものとしてウソをついたとき)、②危険な行為(火遊び、友人をケガさせた、禁止された場所への出入り)、③友人をいじめたとき(弱者をバカにした、〇〇菌遊びによるいじめ)の3つの場合に限られている。

そして親たちが、ビンタやゲンコツに対して全く否定的なのは、14「テストで悪い点をとったとき」である。しかしすでに表1から表4までに見られるように、残念ながらごく一部にせよ、このタブーを犯す教師たちの存在も、どうやら確かなことらしい。この点を、

学校関係者はしっかりと心に留めてほしい。成績が悪い子は、多分に本人のせいではなくて、しばしば親から受けついで遺伝的素質に十分でないものがあつたか、しつても含めて親の用意した生育環境に欠陥があつたことを意味するのかもしれない。そのことで本人がビンタをされるのは、だれが見ても不合理だ。そのことは教育の専門家である先生方が一番ご存知のことではないだろうか。

そしてこれらの中間に位置する体罰のタイプは、「教師の注意を聞かないとき、学校のルールに従わないとき」で、「掃除等をサボる、ケンカ、遅刻、おしゃべり、忘れもの」などがこれに属している。そしてこれらは「しょっちゅう」とのただし書きがそえられ、それまで教師が何度も叱った上で、という条件が設定されているにもかかわらず、3割前後の母親たちからは「絶対すべきでない」と答えられている。この数字も、しっかりと心に留めてほしい。つい激情にかられてビンタをした子の母親が、体罰についてどんな意見の持ち主か。全体としては体罰肯定のムードがあるとしても、ある割合でこれに強く反対する母親たちもいるのである。

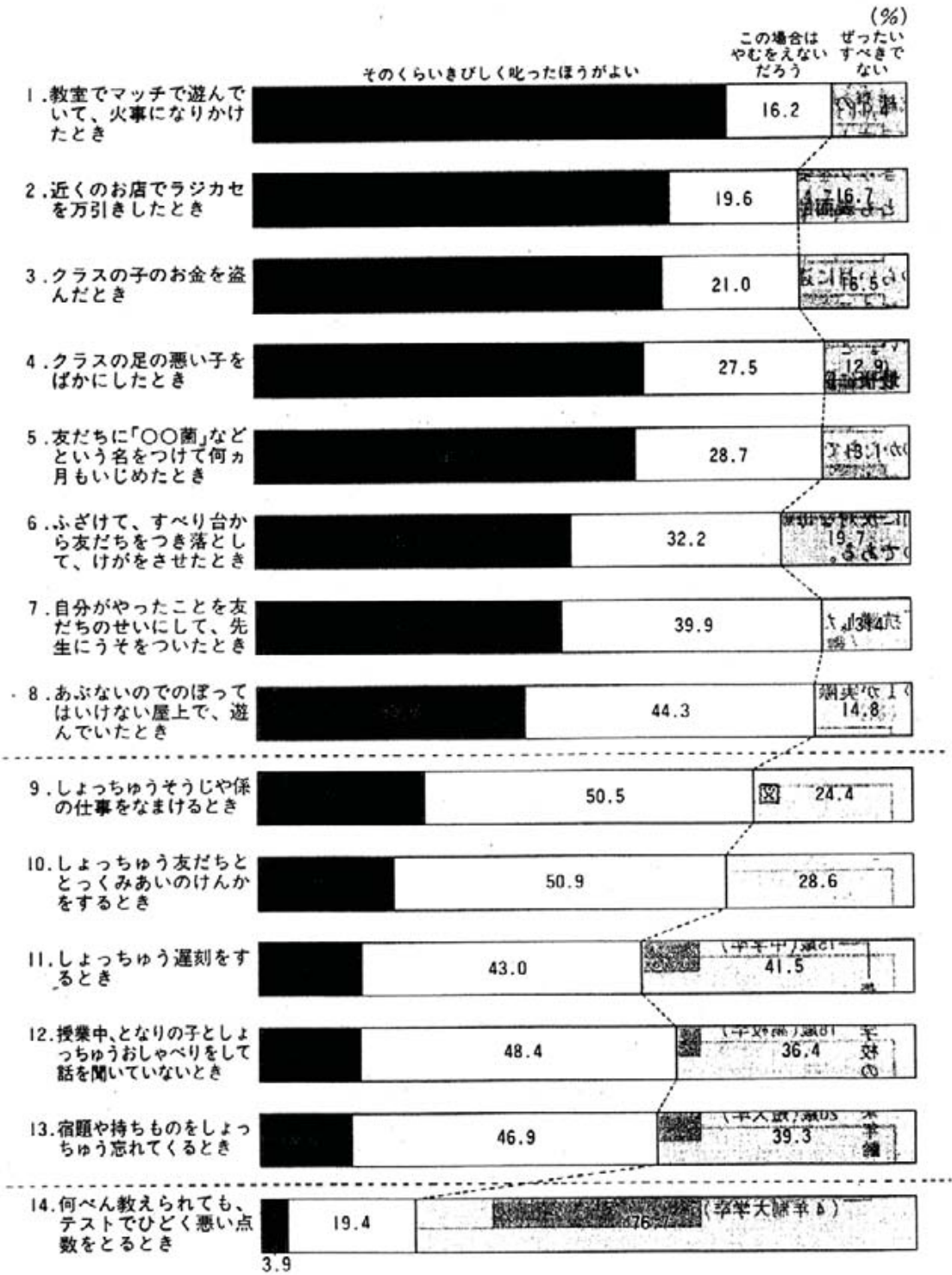
## ● 体罰についての受けとめ方を規定する条件

先に、体罰の有効性についての見方と、子どもの年齢との関係での有効性の判断については、母親の学歴が大きな説明力をもつことが見いだされた。それと連続して、もう少しこうした個人的条件を現実起こったことに即して分析してみることにしよう。

図27は、体罰の受けとめ方と学歴との関連である。単に仮定の場合でなくて、現実にお

が子が教師から体罰を受けたときのことに付いてである。「ビシッとやってもらってよかった」と述べている者の割合は、中高短大卒の母親と大卒の母親とで大きく違っている。たとえば中卒の母親は「よかった」が58%、ところが大卒の母親ではその数値が半分近くの31%でしかない。逆に「何があつたにせよ体罰するとはとんでもない」は、中卒の10%

図26 先生の体罰(ビンタ、ゲンコツ)がやむをえない場合(小学生の母親)



に対して大卒の母親は3倍強の34%である。

さて実際に体罰が行われたケースについて、また別の角度から見てみよう。図28は、子どもがそのことでショックを受けた(元気がないようすがみられた)かどうかを、子どもの成績との関連で分析してみたものである。図が示すように、成績のよい子のほうが体罰にショックを受け、成績の悪い子のほうは少なくとも表面的にはわりと平気なようすである。成績の悪い子は、これまでたびたびこうしたつらい目に逢ってきており、罰に対する耐性とも言うべきものができているのかもしれない。とすれば、まことにかわいそうだ。

最後に図29は、再び母親に戻って、体罰をわが子が受けたとき、親として「教師に何かのかたちで抗議したか」を、「子どものしつけや教育についての自信の有無」との関連で体罰に反対な母親91人について分析してみたものである。

図が示すように、「しつけや教育の自信」と「抗議したかどうか」は、密接な関連を示している。「かなり自信のある」母親層は、3分の1が実際に先生に抗議をし、その数字は自

信がなくなるに従って、22%、19%、14%と低下してゆき、「ぜんぜん自信がない」層では、実に0%となっている。

つまり多くの母親が、たとえ体罰に反対であってもそれについて抗議をしないのは、教育についての自信がないからだ。そしてこの自信がない層とは、分析してみると、多分にわが子の成績が悪い層であり、学歴の高くない層なのである(図表は省略)。とすると、教師が残酷な体罰を用いても親たちが受け入れているのは、ただ子どもの成績が今ひとつ十分でなくて教育に自信が持てずにいる(高学歴でない)層の人びとが多いためなのかもしれないのである。そうした層に支えられて、体罰をつづける教師たちがいるとしたら、それは砂上の城のようなものであろう。日ならずして母親たちがもっと教育についての見識を持ち、もっとしっかりと意見を述べることができるようになれば、たちまち抗議の声が街にあふれるだろう。それを考えれば、きわめて例外的な場合を除いて、直接的な体罰は、ただちに止めるべきである。

図27 体罰の受けとめ方×母親の教育期間(中学生の母親)

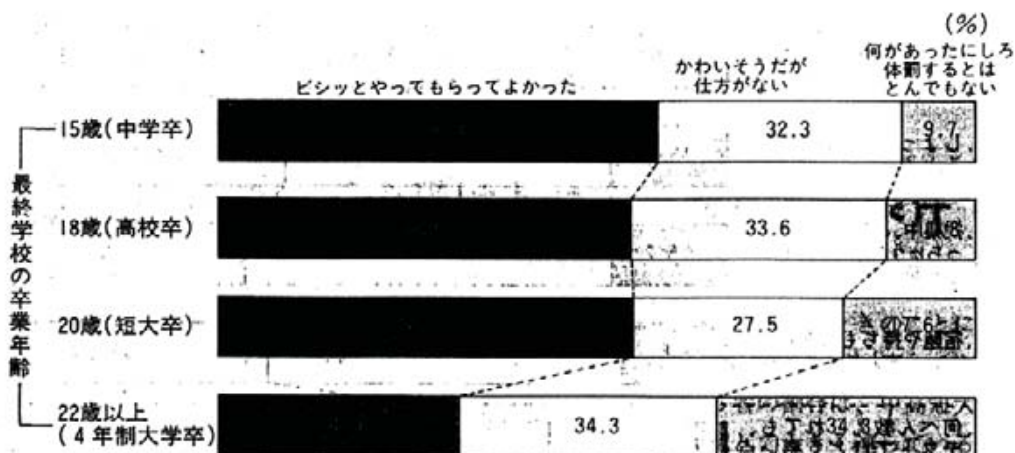




図28 体罰を受けた後のようす×子どもの成績(中学生の母親)

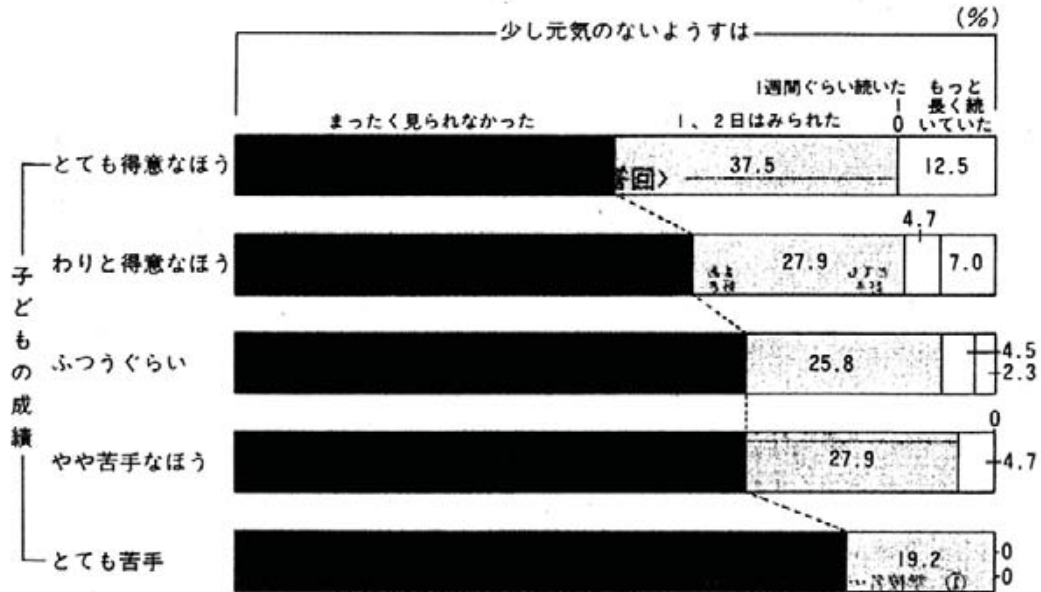
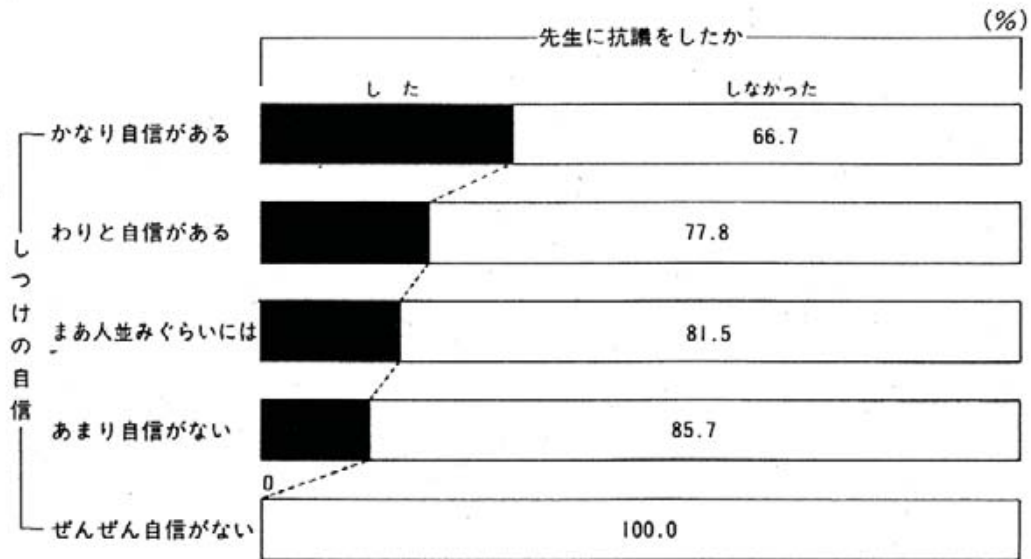


図29 体罰のことで先生に抗議したか×親のしつけの自信(中学生の母親)\*



\*体罰に反対の母親91人について